

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03076

研究課題名(和文) 日米戦時占領期における軍事情報活動MISの研究

研究課題名(英文) A Study on Military Intelligence Service MIS during the Wartime and Occupation between Japan and the United States

研究代表者

大西 比呂志 (Onishi, Hiroshi)

フェリス女学院大学・国際交流学部・教授

研究者番号：70201978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては日本生まれあるいは日本育ちのアメリカ人と、日系アメリカ人2世という、日本にルーツを持つアメリカ人の2つのクロスナショナルな人々が、戦争遂行のなかで心理戦、宣伝戦、情報戦に、占領期には翻訳、通訳といった占領行政に重要な役割を果たし、その結果戦後の日米文化理解と交流につながっていったことを、これら要員の訓練学校が置かれた大学の文書館(ミシガン大学、コロラド大学、スタンフォード大学ほか)や国立公文書館に所蔵される資料によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカは対日戦勝利のために、戦時下に日本語教育を中心に日本文化理解を進める国家的プロジェクトを本格的に着手し、これは占領政策にも生かされた。そこで大きな役割を担ったのが日系アメリカ人2世や日本生まれのアメリカ人などである。この計画は戦後の日米文化交流の基礎になり日米の同盟関係を補完する国民意識の醸成にもつながった。異文化理解と交流が戦争や占領の目的で行われたことは皮肉であるが、戦争終結のために殺傷武器ではなく言語と文化理解を用いたことはむしろ評価すべきである。本研究で用いた国際関係を民間のクロスナショナルな視点から分析するアプローチは、現代史研究に一定の有効性があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, two cross-national people, an American born or raised in Japan or raised in Japan (BIJ), and a second-generation Japanese American (Nisei), played an important role in occupation administration such as psychological, propaganda and information warfare during the war, and translation and interpretation during the occupation period. As a result, this led to cultural understanding and exchange between Japan and the United States after the war. It was clarified by materials held in the archives of the universities where the training schools for these personnel such as University of Michigan, University of Colorado, Stanford University and the National Archives.

研究分野：Modern History of Japan

キーワード：占領政策 日系アメリカ人 横浜 軍事情報活動 MIS

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、日本占領史研究は現代史研究として多くの蓄積を重ねてきたが、90年代後半以降、研究は新たな展開をみせた。すなわち国際関係論の1つとして、極東・日本といったアメリカの戦略地域としての考察から、沖縄や茨城、神奈川といった個別の特性ある地域を対象にして日本現代史との連続面や、また民間セクターの動向へも配慮するという拡大と深化である。こうした視角によって、従来国家の対立関係(戦争の勝利/敗北、占領の支配/被支配)といった政治や軍事に偏りがちな分析を相対化し、また戦時戦後を連続的に捉え、日米の相互関係と占領期以降の推移も把握しようとする展望が拓かれた。

こうしたアプローチを研究の俎上に載せたのは、日米で占領史研究を牽引してきた故天川晃横浜国立大学名誉教授(著書に『地域から見直す占領改革 戦後地方政治の連続と非連続』2001年)、R・ディングマン南カリフォルニア大学名誉教授(著書 Deciphering the Rising Sun: Navy and Marine Corps Code breakers, Translators and Interpreters in the Pacific War.2009)らであり、本研究はこれら先行研究を発展させることを開始当初の学術的背景としている。

2. 研究の目的

上述の先行研究を発展させる上で最も適合的な対象は戦前から日本滞在経験の長いアメリカ人(BIJと呼ばれる)や日系アメリカ人2世という重層的ないしはクロスナショナルなバックグラウンドを持つ人々である。彼らは日米両国の戦時占領期に、基本的に武器を使用せず、言語を通じた意思疎通によって、すなわち文化交流によって両国の対立状況の間で活動した。アメリカ政府が戦時占領期に、どのような意図・計画・組織のもと、彼らをリクルートし戦争や占領に動員・配置して活動させたかという基本的な事実関係は、これまで十分に解明されておらず、本研究が第一に明らかにすべき課題であった。

第二に、心理作戦、宣伝戦、情報戦、翻訳や通訳、尋問などの軍事情報活動 Military Intelligence Service(以下 MIS)となった人々の個別のケースの解明である。これによって政府の意図や計画だけでなく、活動の実態が浮かび上がり、またクロスナショナルなバックグラウンドを持つ彼らが、どのような心理・苦悩を抱えつつ従事したかという思想的分析は、戦時占領期の文化交流を理解する上で重要な問題である。本研究では、こうした MISに関するアメリカ政府の公文書を調査するとともに、従事した個人を特定して調査し、関係資料(記録、オーラルヒストリーなど)を収集することにした。

日米戦争とその後の占領は、むしろ軍事的勝利/敗北、占領の支配/被支配という構図にあてはまるが、一方でアメリカの対日文化理解を進める契機になり、その後の日米文化交流につながる前提になった。本研究は、そうした文化交流という現代的観点から日米の戦時状

態を改めて見直すことを目的とした。

3．研究の方法

上述の目的のために主にアメリカで関係資料の調査収集を行った。調査先は以下の通りである。

2017 年度：Defense Language Institute Foreign Language Center（モンテレー）、Military Intelligence Service Historic Learning Center（サンフランシスコ）

2018 年度：Go for Broke Educational Center（ロサンゼルス）、ミシガン大学 Bentley Historical Library、コロラド大学ボールダー校文書館。

2019 年度：アメリカ議会図書館（ワシントン DC）、アメリカ国立公文書館分館、メリーランド大学（カレッジパーク）、アメリカ海兵隊歴史館（バージニア州）、カナダバンクーバー市図書館、カナダ日系人博物館。

2020 年度は、再度アメリカ及びカナダで終年度の補充調査を行う予定であったが、新型コロナウイルスの世界的拡大の影響で実施できず、前年度までに収集した資料整理と分析を行った。

2021 年度も同様でほとんど進捗しなかったが、2022 年度は渡航条件が緩和された 2023 年 3 月に Go for Broke Educational Center 及びスタンフォード大学フーバー研究所で調査を行った。

この間、MIS など日本占領に関係した在米アメリカ人にインタビューを行い、オーラルヒストリーを作成することにした。またアメリカでの最新の研究動向を把握するために在米研究者との面談（2017 年度 R・ディングマン教授）、アメリカ東アジア図書館協議会の会合に出席し（2018 年度デンバー）、現地の専門家と情報交換を行った。

4．研究成果

これらにより全米各地で MIS 要員の訓練学校の沿革と、在籍した MIS の経歴や活動などについて多くの資料を収集することができた。現在、これらの目録化を進め一部はデータベースとして公開を予定している。

また研究成果の一部はシンポジウム「占領期の都市空間を考える 記憶をいかに継承するか」（大手前大学交流文化研究所、2019 年 11 月）において、「占領期横浜の都市空間」として発表し、これは小林宣之・玉田浩之『大手前大学比較文化研究叢書 16 占領期の都市空間を考える』水声社、2020 年）に収録された。

ほかに本研究の過程で明らかになった事実のうち、戦前戦後の横浜に関連する事項を、一般向けに紹介したものとして、『毎日新聞』神奈川版 2018 年 5 月 4 日～2019 年 7 月 12 日の間、「横浜の中の世界 コスモポリタンたちの現代史」～ を発表した。これを含め本研究全体の成果は、2023 年度中にまとめる予定で準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小林宣之・玉田浩之・佐藤洋一・福島幸宏・大西比呂志・村上しほり・大場修	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 177
3. 書名 大手前大学比較文化研究叢書16 占領期の都市空間を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------